

こうち、(再) (新) 発見！
TOSABUSHI

とさぶし



高知県

【第12号】
二〇一五年

TAKE FREE

特集

山に咲くロマン

目次

写真で綴る 晴れ姿で練り歩き…

とさ印 ステンドグラス

せがれ 恒石知則(恒石畜産)

アゲアゲ天国 玉あられ

伝説探訪 笹の普賢様

移るんです 安徳天皇



TOSABUSHI
とさぶし 第12号
2015年

はみだし企画満載！web限定コンテンツ

web版“あだてん”
<http://tosabushi.com>

Web
リニューアル！
見てちゃ！



facebookもやっています！

<http://www.facebook.com/tosabushi>

発行
高知県文化生活部文化推進課

〒780-8570 高知市丸ノ内1丁目2番20号(本庁舎5階)
Tel 088-823-9793 Fax 088-823-9296
E-mail 140201@ken.pref.kochi.lg.jp
発行日:2015年9月24日(季刊)

企画 とさぶし編集委員会
制作 南の風社

バックナンバーの入手方法

お近くに配布先がない場合は、送料分の切手を送っていただくと、
受け取り次第発送をいたします！

【送料】

1冊・2冊 180円

3冊 215円

4冊・5冊 300円

6冊以上の場合は、一度ご連絡ください。

お問い合わせ・送付先は、高知県文化生活部文化推進課(上記)まで。

トウテンコウ
東天紅鶏：高知県原産の鶏。日本3大長鳴鶏の中で
は最も高い声で鳴き、一息で7～10秒、まれに20秒ほど
鳴くものもある。1936年に天然記念物に指定された。秋
葉祭りの鳥毛にも使われている。



このパンフレットは宝くじの収益金の一部で
作成しています。

ヘイチャンは花取り踊りの一種で、「ヘイ！」のかけ声に太鼓の音「チャン」が入ることが由来と言われている。
他地域の花取り踊りよりも跳ねる動作が大きいのが特徴。



野路菊が足摺の海岸線を白く染める頃。ヘイ！ヘイ！ヘイ！——張り上げた声と太鼓の音が響き、亀甲柄の浴衣にたすきをかけた踊り子は、花のついた太刀を振り回し、猛々しく飛び跳ねる。

山の男が踊る
海岸部の「浦」と山間部の「郷」の2集落からなる土佐清水市貝ノ川地区。郷

ヘイチャン復活

——高知県の祭りと芸能——

中西部は、秋祭りに花取り踊りや太刀踊りを奉納する地域が多い。たすきに白鉢巻の勇ましい高知市・土佐市・日高村、鳥毛をかぶり優美な須崎市・津野山とその周辺、浴衣の着流し姿の幡多郡など地域性がある。そのほか仁淀川上流には太鼓踊り、海岸部を中心にこおどり(うちわおどり)もみられる。

東部は、太刀踊りが室戸市にあるが、盆に花取りを踊る所が香南市夜須町や安芸市・大豊町などに散在する。海岸部の獅子舞、香南市の棒術などのほか、たんじりや花台などがお目見えするのも東部の特徴である。



五穀豊穣に感謝し、日頃の労をねぎらう祭り。高知県では神祭などと呼ばれ、地域独特の習俗が残っている。今も地域の祭りを支える6人の若者たち。そこには語り継がれる歴史、人との出会い、未来へつなぐバトンなど、数々のロマンスが息づいている。

山に咲くロマンス

「ヘイチャンは男の踊り。男が強うのうては神様が安堵できん」という古老の言葉を紹介しながら「かつては集団見合いの場だった」と言うのは、かつてヘイチャンを取材したことのある作家研究家の岩井信子さん(84)。村の娘は乾燥させた野路菊を枕に忍ばせ髪に花の香りを纏いつつ、思いを寄せる若い衆に自ら縫ったたすきをかけてやったという。祭りの後には数々のロマンスが生まれた。

時が移り昭和40年代、集団就職や進学で地元を離れる青年が急増し、踊り手がいなくなった。昭和50年代に一時復活したものの長続きはせず、小中学校の運動会で子どもたちが踊る程度に。さらに2001年の西南豪雨で貝ノ川郷地区の水田と農機具が全滅し、農業をやる人はいなくなり、2006年の小学校閉校でヘイチャンは完全に消えた。

今なお高齢化は進行中で、秋祭りのお神輿を担ぐ者が揃わず、トラックの荷台に載せて各家をまわることで継続している。

で生まれた木村祐三さん(77)は、貝ノ川中学校を卒業した15歳の時に青年団に入った。「郷の青年は秋祭りでヘイチャンをやる。太刀の手さばき、チンガラガラやトントントンの足さばき。地区の先輩に習うて踊ったもんよ」。日暮れが早くなると、お宮の境内に火を焚き、最盛期は40人くらいの青年がぐるりと囲んで練習した。

祭りの前日は宵の宮で夜踊り、当日は朝からお神輿をかき、お宮から田んぼ、人家の前で何度も何度もヘイチャンを踊った。「日ごろ農業や林業をしゅうもんも、だれこけた」。木村さんは踊りがうまい者が務める「音頭取り」として先頭に立ち、25歳で青年団を卒業してからは「唄い手」として大きな蛇の目傘を差して道中を練り歩いた。



ヘイチャンの会場である貝ノ川天満宮に集まった今年の踊り子たち。

1970年代の貝ノ川ヘイチャンの様子
左は廣畑さんの父 喜秀さん(提供: 廣畑靖さん)



ミニ土佐弁講座

※かく: 担ぐ/※だれこけた: 疲れきった



【廣畑靖さん】高校を卒業して関東で自動車整備の腕を磨いた。28歳で帰郷し自動車の仕事を続け、現在は土佐清水市の自動車整備会社の工場長を務める。休みの日は地域の草刈りなどでも汗を流している。

を離れたが、自動車整備の仕事に就き、貝の川郷地区で暮らしている。「今やらなかったらもう終わる」と危機感を持つ近所の女性たちにヘイチャン復活を懇願された。

子どもの頃に踊ったことのある廣畑さんは、物心つく前に亡くなった父も音頭取りをしていたという話を聞かされて、背中を押された。「最初は昔のビデオを見て思い出し、木村のおんちゃんからは、ちゃんと屈んだら動きが大きく、かっこよく見えるとか、踊りの細部を聞いて」、踊りを教える役を買って出た。

30戸ほどになった郷だけでは人が足らず、浦の住民にも呼びかけた。すると小学生から最年長の木村さんまで、さらに女性も加わって老若男女約30人が踊る地区あげての体制となり、毎週土日の夜に集まり練習を重ねる。そして今年10月、10年ぶりにヘイチャンが

復活する。

山間部の神事や地域行事はどこも支える人が足らず、継続の難しさを抱えている。足りないマンパワーは特に若者であり、男性である。地域の高齢者は「地域に若者がいない」と言い、若者は「地域に仕事がない」と嘆く。

消えない祭りの記憶

祭りには代々繰り返されてきたもので、子どもたちにとってその体験や記憶は何らかの形で体に焼きついているのだろう。その後、成長した若者が祭りの一員になるのには、ちょっとした「きっかけ」

りの担当になり、初めて獅子舞の前馬に抜擢された。「獅子舞の型は慣れればできますが、前馬は5kgある重い獅子頭を常に頭上に持ち上げて、決められた首の角度を守り、ぐらつくことも許されない。その上、テガイコを挑発したり脅かしたりの体力勝負」。日が暮れた提灯あかりの神社の境内で演じきった充実感が、今も体の奥底に残っている。

真剣を持つ緊張感「下津井・下本さん」

下本誠さん(39)は、かつて林業で栄え、今も森林軌道跡の「めがね橋」が残る四万十町下津井に生まれた。毎年秋祭りの朝になると、集落の家々を牛鬼が練り歩く。「小さい頃は牛鬼がこおいて。牛鬼を先導する竹笛が聞こえたら布団部屋に潜り込んで隠れよった」。人の何倍もある頭、その形相、大人が7〜8人も入って動かす巨大な牛鬼に怯えた。

下津井では男の子は小学校にあらがると、子どもだけの花取り踊り「小太刀」に参加することができた。「10月に入ったら毎晩練習。1、2年ではよう覚ええん。大人は厳しいし、泣いても許してくれなかった」。中学生になると、大人の花取り踊り「大太刀」が踊れるようになり、その時は家々に受け継がれる真剣を振りかざす。少しでも手元が狂えば相手を斬ってしまう危険がある。でもそれは、怖いというより、憧れ。「真剣を持たせてくれるがは、大人の仲間入りを意味した」と下本さんは振り返る。



【尾木良多さん】日本一の冬春ナスの生産地・安芸市で両親とナスを栽培する。47aのハウスに毎年8月下旬に苗を植え、9月中旬から翌年7月上旬まで収穫は続き、市場やJAに出荷する。家族が食べるピーマンやキュウリなどの野菜や米なども作っている。

があればいい。不思議なもので自然に手足が、体が動いてくる。

母の生まれた里で「沢渡・岸本さん」

高知市で生まれ育った岸本憲明さん(33)は、仁淀川町沢渡地区出身の母に連れられ、小学1年生から中学3年生まで9年間、秋葉祭りに出た。低学年の時は踊り子、高学年になれば笛や太鼓を担う。毎年、正月が過ぎると日曜日には沢渡へ。「市内では珍しい雪が積もっていたり、たき火をしたり、とにかく楽しかった」。練習が終わったあと、大人が鶏を絞めて鍋にして食べるのを見て、子どもながらにぞっとした。

祭り当日、山の細い道を一列になって歩き、家々で御祓いをしたあとと踊る。火消し装束の「鳥毛」が現れると、観客がざわめく。2人一組の鳥毛が踊りながら、東天紅の羽根を先に付けた重さ5kg、長さ65メートルのヒノキの棒を投げる。相方はなめらかな踊りの形を崩さないようにしながら、投げられた棒を肩で受け止める。成功すると観客のテンションは最高潮に。「かっこいい！」。岸本少年の血が騒いだ。「大きくなったら2人で鳥毛をやるう」。1歳違いの弟と約束した。

前馬に抜擢されて「赤野・尾木さん」

安芸市赤野のナス農家の尾木良多さん(28)は、子どもの頃からよく地区の祭りに参加した。「子どもの神輿とか踊りとか。手伝ったらお小遣いをくれたり、打ち上げに連れて行ってもらったり、それが楽しみで」。

高校1年の時、住んでいる地区が祭



秋葉祭り ◆毎年2月9日～11日

火の神を祀る秋葉神社の大祭は毎年2月におこなわれ、お神輿は9日にお旅所の岩屋神社へ、10日は市川家で過ごし、11日に秋葉神社へ帰る。3日目の「練り」の道中、太刀踊り、鳥毛ひねりが奉納され、道化役の油売りが見物客を笑わせる。毎年1万人以上が訪れる。鳥毛は年齢や務める年数に決まりはなく、熟練すると後継者を見つけて教え込む。かつてたくさん人が住んでいた時代は、鳥毛の競争率は高く、長男しかできない時代もあった。祭りの花形でもあり「鳥毛をやったら結婚できる」とも言われていた。

鳥毛を務める岸本憲明さんと弟の将良さん

山間の若者たち

数は少なくとも地域に残る若者がいれば、Uターン、Iターンする若者もいる。若者たちは生活の基盤を作ることに必死だ。そして全員、仕事を終えてから祭りの準備に駆けつける。

みかん畑を継いで「山北・桑名さん」

山北で生まれ育った桑名翔也さん



※テガイコ：獅子にちょっかいを出す役／※こおー：怖くて



【桑名翔也さん】日当たりがよくミネラル豊富な土地を持つ山北は、高知県の代表的なみかんの産地。87aの露地畑で、春から夏にかけて剪定や摘果をする。極早生品種は10月中旬から収穫しJAや産直に出し、3月頃まで出荷は続く。

とはあったが、よくわからないまま、公民館の隣にある山北棒踊り保存会の門を叩いた。

お茶にかける「沢渡・岸本さん」

岸本さんは23歳の時、「鳥毛やってみんな？」と声をかけられた。「大工だった

(24)。熊本で大学生活を送っていた時、山北みかんを栽培していた祖父が体調を崩した。小さい時から祖父母が作るみかんを食べるのが楽しみだったが、両親は勤めに出ていて、みかん栽培を続けられるのは祖母一人。「だったら自分が一緒にやろう」。Uターンして就農することを決めた。

実家の裏山に広がるみかん畑。曾祖父が植えた50年生の樹もまだ残る。「祖父が元気なころはハウス栽培もしていましたが、燃料代が上がってからは露地専門。天候の変化や台風が来ると被害が心配で」。10月中旬からの収穫に備えて、肥料をやったり摘果^{てきか}をしたり、毎日みかん畑で過ごしている。

ある日、祖母と畑に出て仕事をしていると、近所の農家の先輩がやってきた。「農業やるやつたら、棒に入れや」。棒踊りは小学校6年の時に一度したこ

山北棒踊り ◆ 毎年11月18日

浅上王子宮の秋祭りに披露される山北棒踊り。白装束に水色のたすきを掛け、「サイ！サイ！サイ！」と青年が威勢のいい掛け声をあげ、カンカンカンと檜の棒を打ち合う高い音が境内に響きわたる。

約300年前、佐川深尾氏の子孫である山内規重^{のりしげ}は、6代藩主豊隆に山北村に蟄居^{ちつきよ}を命じられた。この時、退屈を紛らわせるため、家臣が付近の若者を集めて小栗流の棒術をしたところ、規重は喜び、引き続き行うようになった。



春は茶摘みと加工。夏、秋、冬は翌年の新芽を育てる親葉がちゃんと育っているか確認したり、草刈や肥料やりに忙しい。合間を縫って、サカキやシキビを採って販売したり、お茶を使った加工品の製造に着手したり、新しい購買層の開拓に余念がない。

「秋葉祭りのある仁淀川町に住みたい」。岸本さんは24歳の時、会社を辞めて妻と子と3人、仁淀川町に移住した。つてを頼って石灰の会社に勤めたが、お茶を栽培していた祖父が病気で倒れた。「今教えてもらわないと、このお茶畑はなくなってしまう」。家族を説得し、お茶畑を継ぐことにした。

ので体力には自信があったけど、棒を受ける肩は内出血するし、棒を持ち上げるため腹筋がバキバキになる。年寄にはいろいろ言われて腹が立つし、よっぽどやる気がないとできん」。見よう見まねで鳥毛デビュを果たした。そして2010年には念願の兄弟の鳥毛が実現した。

企業に勤めながら「下津井・下本さん」

下本さんは、中学卒業とともに地元を離れた。高校を卒業してとび職になり、北は青森、南は鹿児島まで全国を転々とした。結婚を機に、地元の土木会社に入り、下津井に戻ってきた。「祭りにも参加したいし、山で秘密基地を作ったり、川でアメゴをついたりした地元で、自分の子どもも遊ばせたい」。しかし、保育園まで20km、ヘアピンカーブの続く山道は生活のハードルになり、やむなく四万十町大正に引っ越した。

実家の前の田んぼでは、稲を育てて

◆◆ 地域の期待を背に受けて

いる。「水が冷たくて寒暖の差もあるき、おいしいと評判。去年は夏の大雨でようなかったけど、今年は順調」。稲の世話によく下津井に戻っている。

祭りの準備は、短いところで1か月前、長いところは3か月前から始まる。長く続く練習の過程で仲間との連帯が強まり、ライバル心も湧き、たくましい大人へと鍛えられていく。そして当日、多くの観衆の中で踊りきった後の達成感。ますます祭りに惹かれていく。

さりげなく誘われて

【斗賀野・庄野さん

戦国時代の花取城の伝説が語り継がれる佐川町斗賀野出身の庄野治さん(42)。「選ばれた身ながやき、美少年らしく踊れ！」。いきなり檄^{げき}を飛ばされた。社会人になったばかりの時に地元の先輩に誘われ花取り踊りを踊ったが、見るのと踊るのでは大違い。「子どもの頃に確かに見たことはあったけど、刀の振り方に足運び、普段の生活で使わないような筋肉を使うので思うようにいかん」。刀の踊りが3

斗賀野花取り踊り ◆ 毎年11月12日

佐川町斗賀野の白倉神社、美都岐神社では、花笠に山鳥の羽根を付けて被り、刀やなぎなたを持って踊る「花取り踊り」が行われる。謂^{いは}れは戦国時代に遡り、堅固な「花取城」がなかなか落城しないので、軍の中から選ばれた美少年を美しく飾って踊らせると、城中の兵士も町に出てきて見惚れてしまい、その隙に城を落としたという。城があった場所は須崎とも幡多とも言われている。山鳥の羽根の笠をかぶる花取り踊りは、斗賀野を北限に、仁淀川町、須崎市、津野町、中土佐町、四万十町に広がっている。



つ、なぎなたの踊りが3つ、入場退場の踊りを含める7つを踊りきる。先輩から手ほどきを受け、「太鼓の音にあってない」「振りが遅れちゅう」とダメだしのオンパレード。それでも練習を重ね、落ち込まず、先輩たちに付いていく。あとで聞くところによると、地域の祭りを担う後継者を探していた先輩に白羽の矢を立てられたらしい。

仲間と支え合って「山北・桑名さん」

11月に入ると、山北の若い衆が毎夕

【下本誠さん】農機具メーカーの知り合いが毎年買っていくという下本さんのお米。今年は大粒のヒノヒカリを栽培した。農業や化学肥料をなるべく使わないように自然に近い状態で育てている。



練習に集まってくる。棒踊りは小栗流の古武術の一つで、こめかみと膝の二

か所の急所を狙って棒を打つ。「ちょっとでも外れたら、きれいな音は鳴らないし、けがをする。相手を倒すつもりで強く打ち抜かないといけない」。桑名さんは先輩から初級の「ひしの形」を習い、同い年の相手と棒を打ちこむ。「やりゆううちに」に入った！と感ずるときがある。でも、まだ先輩の足元にも及ばない」。保存会には20年以上棒を打ち込む40代の先輩もいる。「棒踊りは坂本龍馬も習った小栗流棒術。棒術を研ぐのはおもしろいし、仲間も楽

しい。結婚しても続けて40代までやるつもりです」。

祭りの謂れを知って「下津井・下本さん」
「担げて、酒が飲めたら誰でもいい」。下津井の若い衆は20歳を過ぎたら青年団と呼ばれ、牛鬼の中に入れるようになる。祭りの当日、先輩が牛鬼に「あこまでまっすぐ行け」と指をさせば、田んぼの中だろが崖だろがまっすぐ行く。それを見て周囲から笑いがおこる。担ぐ人が高齢化した今は、地元で働く四国電力の社員が毎年手伝ってくれる。

出す。「昔は水田やのうて、麦畑。踏めば踏むほど大きく育つもんで、畑に牛鬼を歩かせた。五穀豊穡の意味があったんでしょう」。道なき道を行く牛鬼の謂れを知っていく。

次の世代へ

いろんな形で神事や地域行事に引き込まれる若者たち。かつてを引き継ぐだけでも大変なのに、次代への引き渡しも同時に行っている。

練習が終わったらOBが差し入れてくれたビールや酒を飲むおつかれ会に出る

なく人付き合いのこととか、いろいろ学べる」。

秋葉祭りで踊りと鳥毛を出す奉納組は、岸本さんが住む沢渡地区と、本村地区、霧の窪地区の3つ。地区ごとに練習するが、町内の居酒屋でよく顔を合わせる。「みんなライバルなんで、祭りやなくてもしょっちゅう腕相撲して戦っています」。若者同士、地区は違えて仲がいい。

一方、かつて6集落が持ち回りで担っていた赤野獅子舞は2014年、地区を越えた保存会を発足させた。一度地域を出た人や、市外から移ってきた人も仲間に加わった。「地区が違えば同世代でも知らない者ばかり。獅子舞の練習や祭りを通して赤野全体の若いもんが一緒になって酒も飲める」と尾木さん。若者が一緒になれるのも祭りの効

果、獅子舞を通して気心を通わせ合い、地区全体のつながりをつくっている。

「花取りをやるもんは地元の青年団のような存在」と言う庄野さんは、祭りだけではなく、週2日は佐川の体育会のミックスバレーに汗を流す。さらに、地元の花火大会を手伝ったり出店をしたり、年間通じて地域の活動に参加する。「おのずと横のつながりは強くなります」。

ここ数年、踊り子の子どもやその友達から花取り踊りをしたいと要望が相次ぎ、小学1年生から参加できるようにした。祭りの当日は青年20人に加えて、子ども20人も一緒に花取り踊りを披露する。「自分たちは子どもの頃に踊るチャンスはなかったけど、子どもの時に踊ったら斗賀野の花取りも残っていくがやないろうか」。



【岸本憲明さん】標高300mの急斜面に広がる1.5haの畑でお茶を育て。毎年春には3トン収穫し、「沢渡茶」として販売している。2012年に白あんに茶葉を混ぜ込んだ沢渡大福を商品化し、アンテナショップてんこす(高知市)や高知龍馬空港(南国市)などでも販売している。



【庄野治さん】高知市上町の老舗砂糖卸売会社・竹村商店に20年近く勤務し、家族と暮らす斗賀野から職場へ通い、食品問屋への営業や砂糖や食材の配達を行っている。地元のバレーチーム・スケアクロウズではキャプテン的存在。



赤野獅子舞保存会の尾木佑一さん(前馬)、宮崎武士さん(後馬)、尾木憂希さん(テガイコ)、小松弘延さん(太鼓)

赤野獅子舞 ◆ 毎年7月と10月

獅子頭を持つ前馬と、常に中腰で獅子舞の体の動きを表現する後ろ馬、獅子舞をてがい観客を笑わせるテガイコ、太鼓打ちの最小4人から構成される。飛脚が便書の配達途中に寝ていた獅子をおこしてしまいう「飛脚」や、「どじょうすくい」、「メジロ落とし」など、いくつもの演目が伝わる。テガイコは見物客に助けを求めたり、獅子に噛みつかれて赤ふん姿を披露したり、随所で観客を笑わせる。夏の宵の宮は夜の獅子舞を目当てに、隣の芸西村からも見物客が詰めかけたという。

※あこ：あそこ／※てがう：からかう

という桑名さん。新入りは「新棒」と呼ばれ、宴会では準備や片付けもしなければいけない。会社勤めの仲間を先に返し、最後まで付き合う。「棒踊りの仲間は世代は違うけど、みんな下の名前前で呼び合って、棒踊りのことだけで



下津井仁井田神社大祭

◆ 毎年11月25日

牛鬼と花取り踊りがメインのお祭り。午前中は、若者7～8名が頭が鬼で胴体が牛の形をした体長5mの「牛鬼」を担いで家々を訪れる。午後は、神社の境内で花取り踊りの奉納。大人と子どもが10人ずつ、太鼓打ちを中心に輪になり太刀踊り9番、鎌踊り7番を踊る。最後は餅投げがあり、子どもが生まれた家庭は直径30cmほどの一升餅、二升餅も投げる。奪い合いをすることで子どもの健やかな成長を願う風習も残っている。

人が減り、大勢で味わう高揚感は得にくくなった。しかし祭りには、地域の頼れる男を育てる、地域が一つになる、次世代に引き継ぐ、そんな仕掛けがある。小さい時の経験をつくる——かつて子どもの頃、無意識にできたことを、今の若者たちも自分流で伝えようとしている。



祖父からクリーニング店を継いだ池田怜司さんは
氏神様である、いの町の大国さまで挙式をした。
式の後、商店街を通ってクリーニング店まで歩く。
「まーきれいなこと！」
「晴れ姿を見せてくれて、まっことうれしい」
近所のおばちゃんたちが集まってきた。
新郎が新婦の家に迎えに行く、新居まで道々を練り歩く。
かつては自宅や神社、お寺など地域の中で
結婚のお祝いすることがよくあった。



写真：武内 忠昭



とさ印¹¹

moritakeglassの

ステンドグラス

愛用者

野崎満さん（満月オーナー）

色と模様が織りなす
調和の光



建築設計の仕事辞めて飲み屋をはじめた10年前、高校の後輩がステンドグラスを作り始めたと聞いて、ランブシェードを作ってももらいました。すごく目立つというわけではないですが、灯をつけると心地いい。新居に置きたい、とお客さんから声がかかることもよくあります。

3年前に移転して、店の名前も、内装も変えました。模様替えもしようつもりですが、どこに吊るしても馴染んでいます。普段は気づかないけど、いつもそこで照らしている、そんな存在です。

moritakeglassは、オーダーメイドのステンドグラス工房です。満月（高知市はりまや町1-8-8）には常時作品がありますので、料理とお酒を楽しみながらご覧ください。



牛に
人を
尽くして
笑顔にする

生産者の顔を見せ、
育て方が安心安全。
消費者との信頼を築き、
おいしいを食卓に届けている。

恒石畜産
恒石 知則さん



ジャーマンピルスナーからアメリカのIPAまで、50種類を超える世界のビールに、厳選したビオワインがずらりと並ぶ。「イチオシはネブラスカIPA。苦みがあって肉によく合う!」。ニカッと笑う、恒石知則さん(40)。ある時は酒屋に立ち、ある時は肉を焼いて売る。しかし、本当の姿は、牛飼いなのだ。

四十川が運んできた肥沃な土に恵まれた四十町窪川。稲穂が揺れる水田に囲まれた牛舎の中には、大きなホルスタイン種が320頭。「これは雄の去勢牛。22か月育てて、僕の名前が刻まれた肉がスーパーに並ぶがよ」。

ブランドは「窪川牛」。ポストハーベストフリー、遺伝子組み換えをしてない飼料を与え、通常よりも3か

サニーマートの大型店では、生産者の名前が印字された窪川牛が並ぶ。



月長く育てて、赤身のうまみを引き出す。同じ肥育方法を採用6戸の農家が約1200頭を育てている。

偉大なる父

窪川は江戸時代から米の名産地。米や雑穀、野菜を育てる小規模な農家がたくさんあり、明治期からは使役として褐毛牛が飼われた。戦後、食卓の欧米化から乳牛を飼う農家が増え、一時は県内最大の酪農地帯となった。

その頃、農家を継いだ知則さんの父は肉食が進むことを予測し、米を作りつつ牛を肥育し肉用牛として売り出そうと考えた。しかし、食肉の流通は慣れない上に不透明。安く買

た」。どんな環境でもやっていける度胸がついた。1年間のカウボーイ生活を終えた時には、畜産の道へと心が動いていた。

牛飼いの道へ

帰国後、ビーフキャトルが経営するカット場や、サニーマートで加工と流通を学び、窪川に戻って父と一緒に牛の世話をするようになった。

朝8時半からエサやり、牛舎の清掃、月に数回は出荷をする。当時、牛は200頭ほどで、日中ビーフキャトルの仕事や会議へ出かけていく父を見送り、一人牛と過ごした。

「人懐っこく寄ってくる牛もいれば、人の存在がストレスになる引っ込み思案の牛もいる」。牛にも持って生まれた性格や体質があり、エサの食べ方もペースも違う。サシと呼ばれる脂肪は、少なすぎると固くて食べにくく、多すぎても肉の味がしにくい。世話をする過程で「こうしたらしっかりと牛肉の味がする牛に育つかもしれん」と自分の考えを試したくなっても、エサのやり方、段取りの仕方など、父のやり方には逆らえなかった。



「卒業したら酪農しよう」と考えていたある日、父から電話がかかってきた。「金のこととはかまんき、アメリカ行つてこいよ」。二つ返事で渡米した。

3か月の研修を終えて派遣されたのは、ネブラスカ州のディア・クリーク・クランチ。窪川町とほぼ同じ面積を持つ広大な放牧場だった。「乗ったこともないのに馬4頭をあてがわれ、牛を追わえて、言葉が通じんメキシカンと一緒に暮らし



い叩かれた上、市場や問屋を通して普通の牛肉として売られた。

「自分たちが育てた牛を直接お客さんに届けたい」。まず、肥育に手間暇のかかる和牛からホルスタインの雄牛へ転換し、1972年畜産仲間と会社組織「ビーフキャトル」を立ち上げ、県内量販店との販売を始めた。そして、安定的な流通を追求し、他の肉と混ざらないよう四十町の食肉センターの隣に牛専用のカット場を建設し、部分肉の加工から包装までの仕組みを作った。1993年、四国で初めて生産者の名前を刻んだ牛肉が店に並んだ。

リアルカウボーイ

知則さんは、3人兄妹の次男として生まれた。「牛の鳴き声を手守唄に昼寝して、夜は家で飼っていた地鶏を抱いて寝て」。近所で名前を知らない人はいないほどやんちゃ坊主で、遊び友達は数えきれない。生き物に囲まれ、友達と野山を駆けまわって育った。牛が好きで、高知農業高校の畜産科、北海道農業専門学校で進学した。

考える前に動く

自分には何ができる!?——知則さんはまず仕事のスタイルを変えた。まだ薄暗い朝5時には牛舎に行って、父が来る前に仕事を終わらせた。日中の時間を活用しようと農業青年クラブと商工会青年部に入り、地元酒造メーカーの協力も得て、酒米から育てる酒づくり企画「呑みほうばい」を立ち上げた。「農」と「商」の若者が共に汗を流し、町を盛り上げた。「いろんなところに首を突っ込んできたけど、やっぱりベースは牛飼い」。窪川牛を売り込むため、生産者の2代目たちが集まり青年部を立ち上げた。地域の祭りで肉を焼いたり、スーパリーのバイヤーやスタッフと交流会をしたり。飲み会でアイデ



アを出しあう中で、カレーやコンビーフなどの加工品も生まれた。

次世代の役割

「親父らが築いてきた信頼があるから、T P Pで外国産の肉が入ってきても生き残る自信はある」。急な注文にも応えられるよう、機械化して、徐々に飼育頭数を増やした。牛の食欲増進や消化を助けるために導入していた飼料に混ぜるE M菌は、自家培養してコストダウンもした。

「毎日世話をし尽くしたかわいいう牛を、余すことなく食べてもらいたい。できることなら、骨や皮までも」。仲間に思いを伝えたところ、鉄板焼き屋の店主がハツのステーキやホルモン料理を、カフェの店主は牛スジを煮込んだカレーを考案。どちらも店の看板メニューになった。これをきっかけに「生産者の思いを伝える場を作りたい」という目標へと育っていった。

2015年春、3人は株式会社B O Xを立ち上げ、ビールとワインの専門店「Booker's」を窪川駅前の学園通りに開店した。肉料理とマニアックなお酒があれば、わざわざ足を運んでもらえると踏んだからだ。「いつかは窪川でステーキハウスを」。夢は膨らむ。



株式会社BOXを立ち上げた鉄板焼き屋コールマンの久保充さん(左)とアシアナカフェの岡本進さん(中央)。3人はよく店に集って作戦会議をしている。Booker'sの最新情報はFacebookをチェック！ <http://www.facebook.com/bookers5530/>



アゲアゲ
天国
vol.12

めでたいおやつ 玉あられ

棟上げ、神祭、結婚式、祝い事には餅を撒く。
餅好き土佐人に愛された、
きね搗き餅のあられがある。



「立方体に切ったお餅を炭火にかけてコロコロ、コロコロ転がすと、角が取れて真ん丸になるがです」。玉屋4代目の遠山君枝さん(66)は、明治中期から100年以上変わらぬ製法で、かりっと香ばしいあられを作り続けている。

原料は南国市産のもち米。蒸して、きねで搗き、切り分けて天日に干し、土佐備長炭できつね色になるまで煎る。完成するまで丸3日。「気を緩めたらあられにならない、が先代の父の口癖。餅の搗き加減、干し加減、煎り加減、全て勘所を押さえないといけません」。天候や湿度に左右されず、同じあられになるまで何度も失敗を繰り返した。それから四半世紀、「カラカラと餅を煎る音で加減がわかる」ほど腕前を磨いた。

12年前、娘の結婚式のために紅白あられに挑戦した。「着色料は使わずに、天然の材料で色をつけたい」。思案の途中に莓大福が思い浮かび、ラスベリーに行きついた。試しに果汁を抽出し、砂糖と一緒にまぶしてみると、きれいなうす紅色に染まった。

香ばしい白いあられに、甘酸っぱい紅いあられ。紅白あわせて晴れの門出に花を添えた。



玉あられは、玉屋本店(高知市土居町2-17)の他、高知大丸、西川屋、ひろめ市場のほてい茶屋、森木翠香園にて販売しています。

高知県立歴史民俗資料館 梅野光興さん

今では秘境のような笹ですが、かつては宿屋や商店もあり、人や馬の通る交通の要所でした。自動車がなかった時代は山越えが近道だったのです。普賢堂の祭りもかつては大勢の人で賑わい、男女の出会いの場でもありました。物部町にはこのような山里の踊りが久保堂の岡、五王堂、黒代などに残っています。「お山のディスコ」として有名になった大柝の湖水祭は年々若者が増え続け、今年は1万人の来場者があったそうです。踊り方や歌は変わっても人々が集まり楽しむ祭りのスピリットはしっかり伝えられているのです。

DJは年季の入ったカセットテープを操り、場を盛り上げる。



「まだ半分はあテープが残っちゃう」と確認して、踊りの輪に加わるDJ森安さん。



旧暦6月23日にあたる8月7日。ヒグラシの声に誘われて笹集落へと車を走らせると、小さな提灯が見えてきた。車を降りると、猛暑日が続いたとは思えないほど、ひんやりした空気に包まれていた。境内に5mほどの竹が一本。薄暗くなると、一人、また一人と竹の周りに集まり輪になって踊り出す。右へ3歩、左へ3歩から始まる一連のステップは30秒足らずで、「はっさん」「ばちばち」などと呼ばれている。「お富さん」や「おとるポンボコリン」、どんな曲にも合う不思議なステップで、延々ループで踊り続ける。

普賢様を背負って逃げた和尚の墓もここにあるき、みんなあで踊って鎮めるがよ」。夜の闇が深まり、ステップがこなれてくると、DJの森安健児さん(63)が古いカセットテープをセットする。「お酒飲ませてそのあとは」と男女を煽るような歌詞の「ウルトラCでやりましょう」や、バブル期のヒット曲「CHACHACHA」という土佐弁のロックまで。勢い余った踊り子が竹をゆすると、夜露が降り落ち、歓喜の声があがる。ほとんど人が住まない山奥に、手を打つ音と男女の声がこだまする。

普賢様の伝説 ◆
笹には七堂伽藍の立ち並んだ大きなお寺があったが、長宗我部元親が土佐の国を統一すると、「山奥にこんな大きなお寺があつては戦略上おもしろくない」と焼き払った。徳庵和尚は密かに本尊の普賢菩薩を背負って逃げたが、のちに再びこの地に帰り、もとのお寺のあとにお堂を建てた。

(村のあれこれ／松本実)



【伝説探訪】

笹の普賢様

ふげんさま

高知と徳島の県境に位置する香美市物部の笹集落。数人しか住まなくなった集落に一夜限りのディスコが現れ、人口は二十倍にも膨れあがる。

普賢様を背負って逃げた和尚の墓もここにあるき、みんなあで踊って鎮めるがよ」。

夜の闇が深まり、ステップがこなれてくると、DJの森安健児さん(63)が古いカセットテープをセットする。「お酒飲ませてそのあとは」と男女を煽るような歌詞の「ウルトラCでやりましょう」や、バブル期のヒット曲「CHACHACHA」という土佐弁のロックまで。勢い余った踊り子が竹をゆすると、夜露が降り落ち、歓喜の声があがる。ほとんど人が住まない山奥に、手を打つ音と男女の声がこだまする。

普賢様の伝説 ◆

笹には七堂伽藍の立ち並んだ大きなお寺があったが、長宗我部元親が土佐の国を統一すると、「山奥にこんな大きなお寺があつては戦略上おもしろくない」と焼き払った。徳庵和尚は密かに本尊の普賢菩薩を背負って逃げたが、のちに再びこの地に帰り、もとのお寺のあとにお堂を建てた。

(村のあれこれ／松本実)



高知に残る平家伝説

📍 は、安徳帝が亡くなったという伝説があるところ。

🟦 は、平家の落人が一時滞在したという伝説があるところ。

「高知の研究(第7巻)」 「日本伝説大系(第12巻)」また高知県内の市町村史を参考に、とさぶし編集部が作成。

覚えていないけど、ぼくは1180年、
満1歳4か月のとき
第81代の天皇になったんだ。
で、亡くなるのは1185年、
祖母に抱かれて三種の神器とともに海へ。
まだ6歳4か月、今で言えば
小学校へ入ったばかりだった。
この平家滅亡のシーンは涙を誘い、
歌舞伎にもなっているほどなんだって
後で聞いたよ。



歳で天皇って
すくなくない？

高知移住物語
移るんです

其

落ち延びた？ 安徳天皇

土佐には古くから流されてきた人々がいた。
「どっちに付くのか?」「右か左か、前か後か?」
一歩間違えれば人生が大きく狂う、そんな瞬間が一生に一度はあるもの。
得か損か、信念を通すか曲げるか、迷いは深い。

安徳天皇御影：横倉山自然の森博物館所蔵（模写・複製）

ぼくは「女の子」？

1歳4か月って「若すぎない?」と思うかもしれないが、父の即位は6歳7か月、その1代前も1歳に満たないままの即位で、後白河天皇が院政を敷いていたからのことらしい。当時は公家に割り込むように武家が大きく台頭してきた時代で、朝廷もどっちに付くかの混乱期にあったのだろう。

実は、安德帝は「女の子だった」とも言われている。平清盛が娘を高倉天皇に嫁がせたものの、生まれたのが女の子だったので、継承権を得ようと男と偽った謀ではないか、というもの。まあ、6歳くらいまでは男か女かは疑われにくかったに違いない。

終わりが始まり

安徳帝は亡くなるときも「女の子」だった？ 『平家物語』では入水の際、長く垂らした髪を少年らしく短く結い直したことになる。もともと男の子だったので、逃げるとき見つきりにくくするため女の子を装ったものの、最期は本当の性でということだろうか。

教科書はここで終わるが、土佐では物語がここから始まる。海に飛び込んだとき、安徳帝はすでにすり替わっていて、平家一門約30名とともに1185年4月、壇ノ浦から四国に上陸し、徳島・祖谷へ入り、高知・西熊山から山嶽沿いに本川・越裏門を経て、椿山、別枝都に至り、横倉山にたどり着いた……。

安徳帝は9人いた？

これは、もっとも有力とされる越知に残る伝説。しかし！ 安德帝・平家一門が落ち延びてきたという伝説は高知の山嶽沿いに多数ある。安德帝がここで亡くなったという陵があるとするものは越知町をはじめ、香美市5、大豊町1、仁淀川町1、土佐清水市1、と9つはあり、平家が来たという話は全域に広がっている。（地図参照）

源氏も流されていた

遡ること20年。平治の乱(1159)で源義朝は敗北、長男・頼朝は伊豆へ、5男・希義は土佐へ配流された。源氏再興を謀らんとしていた希義は頼朝の決起を聞いて馳せ参じようとしたが、土佐の平家方に知れ、途中で討ち取られてしまった。

利害も理想もごちゃまぜになりながらも国のあり方の主導権を取ろうと仕掛けて、敗れたら逃げるか、捕えられて流される。しかし、屈辱の地はりベンジの計画を温める地でもあった。

平家伝説の謎

それにしても、なぜ平家の落人伝説は高知に広く残っているのだろうか。しかもそれは、今でも訪れることが難しい深い山々にある場合が多い。

普通 海側から川をさかのぼる形で文化が広がるが、土佐は海側からだけでなく山側からも開けた、と言われている。山嶽地帯に落ち延びてきた人々が、刀を鍛え、手に持ち替えて、山を拓き焼畑を始め、暮らしの基盤を築いた跡が広くある。

高い教養や文化を広め、先祖を想う祭事を興し、土地に溶け込み、耕し続けてきた。それは、誇りと反骨精神に支えられてのものかもしれない。



澤田泰彦さん（越知平家会 事務局長）

越知町横倉山には宮内庁が認める安徳天皇御陵参考地があります。その他の参考地山口、熊本、鳥取、長崎、対馬の全てを訪れましたが、この横倉山が最もともなわしい規模があり佇まいが最高だと思います。鳥居後も天皇家を祀る時の独特の形で、石段は歴代の御陵の一部と同じくまっすぐではなく「く」の字に曲がっているんです。

平清盛の4男・知盛が阿波の豪族・田口氏と企てて、もともと平家派が多かった土佐の西部へ天皇を導いたのではないのでしょうか。30年前の調査では、越知に80人以上の従臣の墓が見つっています。

私はどうも源氏の子孫らしいのですが……。

「ぶしからの贈り物」

ご応募の際にはアンケートにお答えください。
今回の逸品は……

※当選者の発表は、商品の発送をもってかえさせていただきます。

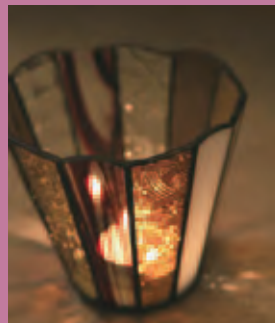
1 Presents 窪川牛すき焼き用 1万円分 1名様



窪川牛ですき焼きパーティ！
注意：生肉でのお届けになります。

2 Presents moritakeglass の キャンドルグラス 1名様

とさぶし特注の世界に1つだけの
キャンドルグラス。



3 Presents 山北みかん 5kg箱 1名様

日当りのいい山北で育った露地栽培のみかん。



5 Presents 玉屋の あられセット 5名様

明治時代と同じ味の玉あられと、
ラズベリー味の彩あられをセットで。



4 Presents 沢渡大福と沢渡茶セット 3名様

白あんに茶葉を混ぜ込んだ大福です。
ティータイムにいかが？



応募はWEBサイト
<http://tosabushi.com>
TOPページ
「ぶしからの贈り物」から

応募締切
2015年11月末

◆ 赤野獅子舞 ◆

安芸市赤野 大元神社、住吉神社

2015年 10月11日 日

午前11時頃に大元神社からお神輿が出発し、
住吉神社近くの浜で12時30分頃から
獅子舞が奉納される。



◆ 貝ノ川ヘイチャン ◆

土佐清水市貝ノ川 天満宮

2015年 10月25日 日

正午からお神輿が地域をまわったあと、
午後1時30分頃からヘイチャンが奉納される。



◆ 斗賀野花取り踊り ◆

佐川町斗賀野 白倉神社、美都岐神社

2015年 11月12日 木

午前9時30分頃から白倉神社で花取り踊りを奉納し、
午後からは美都岐神社で奉納される。



とさぶし12号の特集で紹介したお祭りは
これから行けるものばかり。

地域の青年が支える晴れの舞台を
見に行ってみませんか？

◆ 山北棒踊り ◆

香南市香我美町山北 浅上王子宮

2015年 11月18日 水

午後1時30分頃から棒踊りが奉納される。



◆ 下津井仁井田神社大祭 ◆

四万十町下津井 仁井田神社

2015年 11月25日 水

午前9時頃から12時頃まで牛鬼が地区をまわる。
午後2時頃からは花取り踊りが奉納される。



◆ 秋葉祭り ◆

仁淀川町別枝 秋葉神社

2016年 2月9日 火～11日 木

11日の午前8時頃に岩屋神社を出発して午後3時に
秋葉神社に着くまでの道中、鳥毛ひねりが奉納される。

リニューアルした、
とさぶしWEBが便利！



“あだたん NEWS”は
冊子で紹介しきれなかった
はみだし情報や、
特派員の連載記事などが
続々と更新されています！

タグ検索で気になる記事が
絞りこめる！

新たに搭載したとさぶしMAPは、
地図から記事が読めるだけではなく
GoogleMapと連携して、
ボタン一つでナビ画面へ。
祭りの会場も掲載しています！

詳しくは tosabushi.com または「とさぶし」で検索！